

中国の武器複製プロジェクト

漢和防務評論 20131023 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国の大がかりな武器複製プロジェクトに関する漢和防務評論の記事を紹介します。

中国の新型兵器はロシア製武器の「複製品」が全てですが、中国技術者は、”複製ではなく、手本にしているだけ”と主張しています。外見は似ているが中身は中国独自技術の製品であると主張しています。

実際に、単なる複製ではなく、基礎研究を含めた複製プロジェクトを推進しているようです。そのほうがコストがかからず、開発期間が短縮でき、採用する軍の理解が得やすいからでしょう。

漢和は、単なる知的財産権の問題では済まされないと述べています。中国の武器複製にかかる意気込みは極めて積極的で、ロシア国内における兵器展示会などでは、連日開館と同時に多くの中国人専門家が新型兵器展示場に群がる光景が見られるとのこと。

本誌編集部

各種状況から総合判断すると、中国には巨大なロシア製武器複製プロジェクトが存在し、現在それが進行中である。ある武器は、すでに部隊に装備されたが長年にわたり表面に出ることはなかった。すなわち、一部の複製武器には、研究開発のみを目的に複製されたものと、武器の基本性能を掌握するために複製されたものがある。すなわち学習型複製武器である。

”中国は予算に不足はなかったもので、米国製航空機のエアロ・ダイナミクスについて研究し学習した。例えば、F-16 及び F-15 に対し風洞実験を行った。その主な目的は、米国機の基本設計概念を掌握するためであり、不完全ながらも模倣するためであった”と。航空工業界の情報源はこのように強調した。

”航空武器及び海軍武器の開発も同じである。第一、予算が十分あるので、基礎研究を行わねばならない。すでにロシアで部隊装備された武器のエアロ・ダイナミクス、風洞実験を行って、試作品を造り模擬射撃を行う。一部の事業は企業独自の資金で行われ、その後、軍或いは輸出に回される”と。情報源は

このように述べた。

このほか、ロシア製武器の複製品が次々に生み出される理由は、中国の武器設計者が基本的に創造性に欠けるほか、武器複製は基礎研究のコストがかからず、試験、開発の期間が短く、容易に軍に受け入れられるからである。このように見ると、中国の外国製武器複製の問題は、中国軍事工業界の構造的問題であり、単純に知的財産権の問題として処理することはできない。

しかも国際市場に中国製複製武器が出回っていることについて、中国情報源の多くは「そのように見えるだけだ。我々は、”複製”という言葉は使わない。我々は、ロシア製の同種武器を手本にしたことは認める」と述べている。しかし例えば、国際市場に現れたばかりの **FK-2000** 型弾砲結合防空システムは、外形、性能ともロシア製の **PANTSR-S** 型に酷似している。

すでに数年前、秘密裡に部隊装備された **TorM1** 型地对空ミサイルの中国複製版は **HQ-17** 型と称される。**KDR** 記者は、数年前に西安の兵器工場でのこの型式のミサイルを発見した。設計者は、”確かに **TorM1** の複製である”ことを認めた。多くの複製武器設計者は、国際的な場所で次のように主張している。すなわち、「我々の主張する”手本にする”ことと、”単なる複製”とは異なる。いわゆる複製とは、徹頭徹尾完全複製することである。しかし我々の”手本にする”こととは、主に”概念を導入する”ことにあり、内部機構及び技術の多くは自前の技術である。我々の製品は、自前の技術を総合して完成させた製品である」と。

ロシアのサンクトペテルブルグにおいて、**TorM2E** の設計者が **HQ-17** のニュースを見て、**KDR** に対し次のように述べた。すなわち、「我々は、中国人が”概念”においても、ミサイルのエアロ・ダイナミクスにおいても **TorM1** を複製したと認定している。しかし具体的な内部構造及び技術は全く同じとは言えない。100%複製することは極めて困難だ。最新型 **TorM2E** は現在更に多くの開発技術を利用している。内部のコントロール・システムは、中国陸軍が獲得した **TorM1** とは完全に異なっている。**TorM2E** の操作員は僅か 2 名であるが、**TorM1** は 3 名である」と。**KUPOL** 工場の情報源はこのように分析した。

ロシア製武器の複製品の一部は、現在まで正式に部隊装備されておらず、開発及び試験用にのみ用いられた可能性が極めて高い。例えば、中国は **AK-130** 型艦砲を複製し、**3M-54** 型等の潜水艦発射ミサイル武器は複製するため分解され

たと **KDR** は認識している。このほか **KDR** は中国が複製した **3M-80E** 型艦対艦ミサイルの試作品を発見したことがある。これは部隊装備されていないようだ。理由は上述の通りであり、一部の複製品は、分析、試験のため複製されており、企業が独自に行っている。中国が **3M-80E** を複製する目的は、パルスロケットエンジンの作動原理を研究するためである可能性が極めて高い。

複製版の **CAK-130** 型艦砲は、**052** 型ミサイル駆逐艦の 3 番艦に取付けられたが、砲塔の外形は若干変更されている。しかし一見して **AK-130** の構造であることが分かる。軍事工業界の情報源によると、実験段階において、砲塔の外形すら **AK-130** に酷似していたが、ロシアの反感を恐れ、臨時に設計変更したという。したがって極めて粗雑な造りになっている。

近年来、中国の専門家は、インドとロシアが共同開発した **BRAHMOS** 型多用途ミサイルに極めて大きな興味を示している。詳細に観察したところ、中国の専門家は、国際的な武器装備展覧会のたびに、専門の研究グループを派遣しているようだ。本誌記者は、中国の専門家から **YAKHONT** 型ミサイルの技術や記者の見解を何度も質問された。

本誌記者は、“ロシアの専門家と貴方方は親密のはずなのに、なぜ彼らに直接質問しないのか？”と返答した。

2009 年のモスクワ航空ショーにおいて、**BRAHMOS** 社は、本誌に **BRAHMOS** 型ミサイルのパフレットをくれた。したがって本誌は航空ショーの期間、毎日さらに多くの情報を入手するため、記者を毎日朝 8 時に会場に向かわせ、**BRAHMOS** の展示台に張り付かせた。しかし驚いたことに、8 時前から数十名の中国専門家集団が展示台を取り囲み、長時間写真撮影を行っていた。

モスクワ航空ショーの開催場所は、市街地から相当遠い。8 時前に会場に着くためには、5 時には行動を起こす必要がある。中国はこのように積極的なのだ。したがって本誌の予想に誤りが無ければ、遅かれ早かれ中国版 **BRAHMOS** /**YAKHONT** が出現するであろう。

皆さんは、ロシアが **SMERCH MRLS** のために開発したサーモバリック弾をご存じでしょうか？1990 年代のロシア陸軍の装備品展示会では、中国人がこの弾薬に群がり、写真やビデオ撮影した。当時、本誌は、中国は数年後には必ずクローン版のサーモバリック弾を開発するだろうと予測していた。現在、中国陸

軍は、非常によく似た弾薬を装備している。

ロシアの戦術ミサイル武器集団の情報源は、**KDR** に対し次のように述べた。すなわち、「中国は、かなり多くの種類のロシア製戦術ミサイルを輸入した。しかし一部の品種は数量が多くない」と。その理由は複製するためであると **KDR** は分析している。

中国の **HQ-9** 型地对空ミサイルは、外形も弾体も、また発射機もロシア製 **S-300** 型地对空ミサイルを複製したものである。**S-300** は、進化に応じ **S-300PMU-1** から **S-300PMU2** に、さらに **S-400** 型にグレードアップしている。中国が複製版の改良を行っているのは明らかだ。

最近、中国のネットの中に、ロシア製 **64N6E** 型大型フェーズド・アレイ・レーダーに酷似したアンテナを発見した。このことから、**S-300** のレーダー、戦術管制、及び指揮システムは、中国によって概念上からも複製された可能性がある。これらの複製プロジェクトは、今後も継続されるであろう。なぜならば、ロシアのシステムもまた進化しつつあるからである。中国は **64N6E/E2** 型フェーズド・アレイ・レーダーを獲得した。

ロシア製兵器は、どの程度の種類の兵器が複製されるのだろうか？結論は次の通りである。すなわち、「およそ中国は、自らは何にも持っていない。中国は、すでに獲得したロシア製兵器を、第一に研究し、測定して製図し、その後、部隊或いは国際市場の需要に応じて複製が必要かどうか決定する」。

この意味から言えば、**J-15** 及び **J-16** 型戦闘機から見えるものは、大型複製プロジェクトのみである。複製プロジェクトを後押しするものは、当然具体的な複製対象である。

以上